

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

異分野融合による人類史規模での移動概念を求めて
＜共同研究：人類史における移動概念の再構築：
「自由」と「不自由」の相克に注目して＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 英明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009498

異分野融合による人類史規模での移動概念を求めて

文・写真 鈴木 英明

概要

本研究は、人類史における移動概念を、とくに「自由」と「不自由」の相克に注目して再検討し、移動研究の新たな地平を開こうとするものである。人が移動する要因には、迫害や紛争、あるいは天災など生存に関わる現象からの「避難」、特定の集団や個人に対する「強制」、自由意志が先立つ「移住」などさまざまな位相がある。このなかで「強制」については、とりわけ移動者の不自由性や被害的側面、悲劇性ばかりが強調され、移動者は主体性のない存在として理解されてきた。たとえば、奴隷交易はその際たる事例である。現在、さまざまな関連史跡が世界遺産に登録されるなどし、奴隷交易の記憶化が進められているが、そこで描かれる奴隷像というのは、まさに不自由、被害者、主体性の喪失、悲劇といったキーワードで貫かれている。こうしたメッセージは力強く、ときにそれに異論を唱えるのも憚られる場合が少なくない。また、もちろん、そうしたキーワードが奴隷交易の現実と乖離しているというわけでもない。ただし、同時代文献を丹念に読み進めていくと、それらのキーワードだけで奴隷交易が語られるわけでもなさそうなことに気がつく。そもそも、自由という概念自体が世界的に、通歴史的で普遍的な概念だったわけではけっしてない。これは日本語で自由という訳語が生まれてきた経緯を辿れば理解できる。また、被害者というの、たしかに奴隷化され、売買の対象になったという意味では被害者であるが、多くの場合、奴隷化は戦争の結果として生じるものであり、被害者がかつて別の誰かを奴隷化していた場合が少なくないし、また、彼や彼女を奴隷化した加害者がいつか転じて被害者になることも否めないのである。主体性の



豪シドニーのQステーション（検疫所）に残された日本国旗の落書き (2013年6月)。

喪失についても、近年の研究では奴隷たちのさまざまな場面における主体性の発揮が明らかにされている。逃亡はその最も顕著な事例だが、それに留まらず、より日常的な多様な振る舞いも彼らの待遇や移動が決定される際に発揮された主体性として評価する研究動向も顕著になっている。これらを踏まえれば、奴隷交易を一方的な悲劇とみなす見方が、いかに奴隷交易の現実をねじ曲げて表象された結果であることがわかるだろう。

本研究では、「強制」に含まれる移動現象（たとえば、奴隷貿易、強制移住、契約労働、政治難民）を軸に、時間軸と空間軸との結節点が異なる事例を研究対象として取り上げ、それぞれの事例において、「自由」と「不自由」がどのように相克しているのかを検討し、事例間の比較を試みながら、人類史における移動概念について再検討する。具体的には、移動を生じさせた政治的、宗教的、経済的、あるいは文化的、自然環境的な要因を踏まえながら、他方で、移動する個人や集団の立場から移動現象を捉えなおす。このようにマクロな視点とミクロな視点とを交錯させ、「自由」と「不自由」の相克に着目しながら、コンテキストの異なる多様な移動を比較・連関させることで、人類史における移動研究の新たな展開に資する概念の再構築を目指す。

意義

本研究の大きな意義は、新たな学知の形成を目指した分野間交流にある。これまで人の移動という現象については、その実態こそ、さまざまな時代と地域とを対象に解明が試みられてきたが、移動の意味自体を人類史規模で問うことは十分にされてこなかった。むしろ、移動の意味は各学問分野において論じてこられ、それぞれの分野で移動に関する概念がいわば孤立しながら形成されてきた。この問題に対して、本研究では、時間軸と空間軸における多様な交差点を事例にして、かつ、それらの移動を、そこに見える「自由」と「不自由」の相克という観点——たとえば、自由とされる移動のなかに不自由があり、逆に不自由とみなされる移動も完全には不自由ではない——から比較・連関させ、多様な学問分野から検討を積み重ねることで、具体的でありながら、人類史規模で移動という現象の意味を理解するうえでの重要な基礎が築かれると考える。

以上の点を念頭にして、本共同研究では、歴史学、文化人

鈴木 英明（すずき ひであき）

国立民族学博物館グローバル現象研究部助教。歴史学、インド洋海域史研究。著書に *Slave Trade Profiteers in the Western Indian Ocean: Suppression and Resistance in the Nineteenth Century* (Palgrave 2017)、編著に『東アジア海域から眺望する世界史—ネットワークと海域』（明石書店 2019年）、*Abolitions as a Global Experience* (NUS Press 2015) がある。



ケニア北部沿岸の波止場（2019年10月）。

類学、生態人類学、考古学、宗教学、地域研究など多様な分野を専門とする研究者の参加を得ることができた。共同研究者の具体的なテーマとしては、世界経済と西アフリカ商人コミュニティの移動、東欧社会主義下の亡命知識人の移動、南部アフリカの自然保護と地域住民の移動、現代ルーマニアのEUへの移動と経済的隷属、古代中央アジアにおける人とモノの移動、近世カリブ海における政治権力の海洋支配と私掠船、海賊船の移動、パクスモンゴリカにおけるムスリムの移動、現代南アジアにおける商人コミュニティのコスモロジーと移動、現代のロマのEUへの移動、奴隷制廃止後の西アフリカにおける換金作物栽培と労働力の移動、中世紅海を跨いだ宦官の移動、近代太平洋をまたぐ契約労働者の移動が挙げられる。代表者もすべての共同研究者といまだ直接的な面識がなく、共同研究者間でも同様であろう。本共同研究会を機に、移動概念の再構築という共同研究会そのものの目的はもちろん、個々の研究者の新たな邂逅がそれぞれの研究において新たなものを生み出す契機になることを願っている。

目指す成果

本研究では、人類史における移動の意味に対して、完全な答えを出すことは目指さない。むしろ、この問いに答えていくために不可欠な移動概念を、「自由」と「不自由」の相克に着目しながら、異なる学問分野、異なる視点——ミクロとマクロ——、対象とする時代・地域の異なる事例とを交錯させながら再構築する。これは、上述の問題に対して貢献が期待されるばかりでなく、学融合的な研究のあり方についてのひとつの試みとしての重要性も兼ね備えている。これと関連して、もうひとつの期待される成果とは、移動を焦点にした、

「自由」／「不自由」の概念の再検討である。双方は二項対立的な概念として理解されてきたが、その前提を取り払い、双方の連続性、重層性とに着目する。これによって、「自由」／「不自由」をめぐる議論に関しても、やはり、学融合的な立場から「自由」と「不自由」とを連続させる新たな地平が切り拓かれると考える。

本共同研究会の進行予定

2020年度以降、年3回ほどの研究会を予定している。とりわけ、各研究会で以下の点に留意しながら、議論を積み上げていきたい。①事例間の連関の諸相、②人が移動することによって、どのような「境界」を越えたのか。これらに留意しながら、既存概念の解体と新たな概念の構築を目指していく。なお、最終年度には公開ワークショップも計画している。以上の蓄積を踏まえて、成果の刊行を目指すという進行予定になっている。



ガンビアのホテルの入り口に掲げられた人身売買の警告（2019年12月）。



カタール・ドーハのバスターミナル（2015年5月）。